

# 宮城県多賀城市を中心とした板倉の形態と技法 (THE FORM AND TECHNIQUES OF ITAKURA IN TAGAJI CITY MIYAGI PREFECTURE)

渡邊 亮 (Ryo Watanabe)

The purpose of this study is to explore the form of “Itakura,” a traditional type of warehouse in Japan; the technique used in its creation, and the relationship with carpenters. This study investigated warehouses in Tagajo City and those around Miyagi Prefecture which were damaged in the 3.11 earthquake. In addition to “Itakura,” this study also examined the “Dozou” and “Ishikura” types of warehouse. During these investigations, this study found many special carpentry techniques used in the creation of the warehouse and came to understand the difference in quality among these techniques, especially regarding the pillars “sigebashira”, “hanbashira” and the wooden walls used in their construction. “Itakura” can be classified into three types: “Hame-Itakura,” “Otoshi-Itakura,” and “Seirou-Kura”. Among them, in Miyagi prefecture, “Hame-Itakura” is the most prevalent. Its main features are “Nuki” attached to the outside of the warehouse, whose role is to join the pillars of the building, a number of pillars standing in line whose intervals vary to improve their practical performance, and the decorations made on the eaves of the warehouse. As a result of this study, it has become clear that there have been great changes in the construction techniques of Itakura depending on the era of their construction. In this study, the differences between warehouses in Tagajo city and those in other regions were examined from the viewpoint of both their construction and their appearance.

## 1. はじめに

平成 23 年から多賀城市の「板倉等調査・保存・活用事業に関わる調査」<sup>注 1)</sup>の依頼を受け、その後東日本大震災で板倉等も被害を受けた為、その文化的な価値や活用を目的とした大規模調査を行った。

板倉には大きく分けて、木材を井桁に組んで積み上げた「井籠倉」、柱に溝を掘り、そこに厚板を落とし込んだ「落とし板倉」、柱間に溝を入れ板をはめ込み、貫を組んだ「はめ板倉(羽目板倉)」が存在するが、宮城県のそして多賀城市では、主に靱の貯蔵の目的で「はめ板倉」が広く分布している。明確な定義はないものの、この「はめ板倉」のうち柱が密に並んでいるものを「繁柱形式」と仮称しており<sup>注 2)</sup>、多賀城市でもこの繁柱が注目された(写真 1)。当地域より北東に位置する北上川流域の繁柱形式の板倉については、黒坂貴裕氏をはじめとした「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」の論文<sup>注 3)</sup>があり、

江戸期から明治期の特徴と変遷として、次の 5 項目にまとめることができる。①柱間寸法が 1 尺前後まで狭くなり、半柱が消える。②入口・底下の装飾が増す。③置き屋根形式も採用される。④気仙大工の関わりが認められる。⑤宮城県の繁柱形式は繁柱と一枚板の縦張りの板壁を特徴としている。尚、同論文では今後の課題として、宮城県における「はめ板倉」の基本形式の検討を進める必要がある<sup>注 4)</sup>、と述べている。

以上のことを受けて、本報告では多賀城市を中心とした周辺地域の数多くの板倉調査を行い、その形態と技法を明らかにし、また、大工職人との関係も考察しようとするものである。加えて、繁柱形式についても、ひとつの基準を提案したい。

## 2. 調査の概要

調査は平成 23 年から 26 年の期間で、板倉 52 棟<sup>注 5)</sup>に及ぶ(表 1)。調査開始時には述べ 135 棟の板倉が点在していたが、その内、文化財課がリストアップを行った対象を中心に調査を行った。調査地域は、八幡、市川、南宮、浮島、高橋、高崎、山王、新田の 8 地区であり、実測調査では、平面図、正面・側面の立面図、断面図、配置図を作図している。表 1 では板倉を建設年で序列し、各項目の寸法や事項をまとめている。

## 3. 郷倉と板倉の基本形式

県内の板倉の基本形を見るため昭和 11 年(1936)に発刊された「宮城縣郷倉誌」<sup>注 6)</sup>を検討した。宮城県では昭和 9 年に東北凶作に遭い、共同運営を目的とした郷倉の重要性が再



写真 1 繁柱の板倉 (No. 20)

表1 多賀城市の調査板倉一覧

板倉番号	所有者	住所	開設地	建設年	建設年推定	推定含む建設年(西暦)	移築の有無	入口	風返し	桁行き(m)	奥行き(m)	面積(m <sup>2</sup> )	縦横比(1:x)	棟木高さ(m)	貫本数(本)	柱の幅(om)	柱の間隔(om)	合決り	壁板向き	壁厚(om)	半柱	窓柱	中二階	内部小部屋	置き屋根
1	S	市川字立石		江戸(天保6年)	墨書	1835	有り	平入		5.40	3.60	19.44	1.50	4.12	3	13~14	44	-	横	2	○		○	和(二段)	
2	E	新田字南関合		江戸(弘化4年)	墨書	1847	有り	平入	○	5.49	3.66	20.09	1.50	4.10	3	12~13.5	60	-	横	3			○	和(一段)	○
3	K	市川字坂下		江戸(文久3年)	棟札	1863	無し	平入	○	4.65	3.16	14.69	1.47	3.81	3	12~14	37	-	横	2.5				和(一段)	
4	K	市川字金堀		江戸(安政6年)	墨書	1859	-	妻入	○	4.54	3.02	13.71	1.50	4.00	4	12.5	37.5	○	横	1.5	○		○	和(二段)	○
5	A	山王字東町浦		江戸(文久4年)	墨書	1864	有り	平入	○	5.59	3.89	21.75	1.44	4.28	3	15	31	-	横	2	○	○	○	和(一段)	○
6	I	八幡3丁目		江戸時代後期	聞取り	1761~1867	有り	平入		5.34	3.55	18.96	1.50	4.50	5	13.5	36.5	○	横	4.3			○	和(一段)	
7	M	八幡2丁目		江戸時代後期	聞取り	1761~1867	有り	妻入	○	4.53	3.64	16.49	1.24	4.00	4	14	45	無し	横	2.2			○	合掌	○
8	I	八幡3丁目		不明	推定	1868~1911	無し	妻入	○	4.56	3.04	13.86	1.50	3.74	3	10~11	43	-	横	1	○			和(一段)	
9	K(北棟)	市川字五万崎	39	不明	推定	1868~1911	無し	平入		4.54	2.28	10.35	1.99	3.40	0	11	46	○	横	2	○			和(簡易)	○
10	I(南棟)	南宮字町	28	明治6年	墨書	1874	有り	平入	-	5.44	3.63	19.75	1.50	4.80	4	13	45	○	横	2.3				和(一段)	
11	Y	市川字五万崎		明治22年	墨書	1889	無し	平入	○	6.44	4.55	29.30	1.42	4.46	4	16	46	-	横	3			○	和(二段)	
12	K	高橋5丁目		明治25年	墨書	1892	有り	妻入	○	4.70	3.76	17.67	1.25	4.35	3	13~14.5	47	-	横	2				和(一段)	
13	I	南宮字町		明治末	聞取り	1900~1911	-	妻入	○	5.52	3.65	20.15	1.51	4.31	4	12	30.5	○	横	2		○	○	和(二段)	○
14	S(北棟)	高崎一丁目	40	明治以前	聞取り	~1911	有り	平入	○	5.60	3.80	21.28	1.47	4.60	5	13~16	27	○	横	2		○	○	和(一段)	○
15	A	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	無し	平入	○	4.92	3.64	17.91	1.35	4.47	4	13	30	二枚板	横	2	○		○	合掌	○
16	I	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	-	妻入	○	5.44	3.63	19.75	1.50	4.26	5	13.5	30	二枚板	横	3	○	○	○	和(一段)	
17	G	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	無し	平入	○	5.57	3.77	21.00	1.48	4.36	5	12~14	30.5	○	横	2.5		○	○	和(一段)	
18	S	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	-	平入		5.51	4.11	22.65	1.34	4.75	4	11~13	35	○	横	2			○	合掌	
19	T	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	-	平入	○	4.64	3.11	14.43	1.49	3.92	4	11.5~13.5	29.5	○	横	2		○	○	合掌	
20	T	南宮字町		明治	聞取り	1868~1911	無し	平入	○	5.65	3.62	20.45	1.56	4.20	4	11~15	23	二枚板	横	2	○正面	○	○	合掌	○
21	I	山王字東町浦		明治	聞取り	1868~1911	無し	平入	○	5.45	3.67	20.00	1.49	4.16	4	13	42	○	横	3			○	合掌	
22	S(東棟)	市川字丸山	23	明治	聞取り	1868~1911	無し	妻入	○	5.41	3.59	19.42	1.51	4.51	4	15~18	45	○	横	2.5			○	和(二段)	○
23	S(西棟)	市川字丸山	22	明治(22の数年後)	聞取り	1868~1911	無し	妻入	○	5.43	4.33	23.51	1.25	4.61	4	15~18	37	○	横	2.5			○	合掌	○
24	E	新田字北関合		明治	聞取り	1868~1911	有り	妻入		5.46	3.67	20.04	1.49	4.10	3	13~14.5	45	-	横	2			○	和(三段)	
25	K	市川字城前		明治	聞取り	1868~1911	無し	妻入		5.43	3.66	19.87	1.48	4.26	5	12~14	29	○	横	2		○	○	和(一段)	
26	S(南棟)	南宮字町	27	明治	聞取り	1868~1911	無し	平入		5.39	3.63	19.57	1.48	4.30	3	11	36	無し	横	2			○	合掌	
27	S(北棟)	南宮字町	26	明治	聞取り	1868~1911	無し	平入		3.65	3.16	11.53	1.16	3.80	4	13	30	○	横	2.5		○	○	合掌	
28	I(北棟)	南宮字町	10	不明	推定	1868~1911	有り	平入		5.45	3.64	19.84	1.50	4.70	5	13.5	30.5	○	横	2.3		○	○	和(一段)	
29	S	市川字坂下		不明	推定	1868~1911	無し	妻入	○	5.44	3.61	19.64	1.51	3.82	4	12	42	○	横	2				和(一段)	
30	S(南棟)	市川字泰社	31	不明	推定	1868~1911	-	妻入		4.99	3.11	15.52	1.60	4.10	3	13	24	○	横	1.5	○	○	○	和(二段)	○
31	S(北棟)	市川字泰社	30	不明	推定	1868~1911	-	妻入		3.64	2.86	10.41	1.27	3.40	3	11	23.5	○	横	1.5	○	○	○	和(一段)	
32	O	南宮字町		100年以上	聞取り	~1912	-	平入		5.44	3.64	19.80	1.49	4.65	5	13~16	30	○	横	2		○		合掌	
33	T	高崎2丁目		100年位前	聞取り	1912	無し	妻入		5.38	3.76	20.23	1.43	3.82	4	13	29	○	横	3		○	○	合掌	○
34	T	八幡2丁目		大正7年頃	聞取り	1918	-	平入	○	5.01	3.62	18.14	1.38	4.00	4	12.5	45.5	○	横	3				和(一段)	
35	O	南宮字町		大正14年	墨書	1925	有り	平入		5.48	3.65	20.00	1.50	5.60	5	14	32	無し	横	2		○	○	合掌	
36	K	山王字中山王		大正	聞取り	1912~1925	有り	妻入		4.44	3.18	14.12	1.40	3.89	3	12.5~14.5	30.5	-	縦	1.8		○	○	合掌	○
37	K	南宮字町		不明	推定	1912~1925	-	妻入	-	5.40	3.60	19.44	1.50	4.04	4	13	30	二枚板	横	3		○	○	和(一段)	
38	S	南宮字町		不明	推定	1912~1925	無し	平入	○	5.45	3.65	19.89	1.49	4.40	5	14	30.5	○	横	2		○	○	合掌	
39	K(南棟)	市川字五万崎	9	不明	推定	1912~1925	無し	妻入	○	5.47	3.66	20.02	1.49	4.10	5	13.5	46.5	○	横	2				合掌	
40	S(南棟)	高崎一丁目	14	昭和3年旧11月	墨書	1928	無し	平入	○	5.45	3.71	20.22	1.47	4.30	4	13.5~16	30.5	○	横	2		○		合掌	○
41	W	八幡2丁目		昭和4年旧7月	墨書	1929	-	妻入	○	3.65	3.19	11.64	1.14	3.70	4	11	43.5	○	横	2			○	合掌	
42	T	八幡2丁目		昭和11年4月	聞取り	1936	-	妻入		3.65	2.73	9.96	1.34	3.60	3	10	60.5	無し	横	3			○	和(二段)	
43	G(恩賜郷倉)	八幡2丁目		昭和初め	聞取り	~1936	有り	平入		5.45	3.63	19.78	1.50	3.88	4	11~12	60	-	横	2				和(三段)	
44	M	八幡3丁目		70年以上	聞取り	~1942	-	妻入	○	4.50	2.99	13.46	1.51	4.29	4	11~12	29	-	横	3		○	○	和(二段)	
45	T	八幡3丁目		不明	推定	1926~1945	無し	妻入	○	5.50	3.65	20.08	1.51	4.63	4	12~13	35	○	横	1			○	和(二段)	○
46	S	市川字大畑		不明	推定	1926~1945	有り	妻入	○	5.73	4.53	25.96	1.26	4.73	4	14	33	○	横	2		○		和(一段)	○
47	S	市川字泰社		不明	推定	1926~1945	-	平入	○	4.92	3.17	15.60	1.55	3.83	4	12~13	44	-	横	2.3			○	和(二段)	
48	T	南宮字町		不明	推定	1926~1945	-	平入	○	5.42	3.68	19.95	1.47	4.50	5	13	30	○	横	2		○	○	合掌	
49	S	市川字大畑		不明	推定	1926~1945	無し	妻入	○	5.47	4.08	22.32	1.34	4.70	5	14	46	○	横	2			○	和(一段)	○
50	S	南宮字町		昭和23年	墨書	1948	-	妻入	○	5.47	3.65	19.97	1.50	4.48	4	12	30	無し	横	3		○		合掌	
51	S	市川字丸山		昭和23年	聞取り	1948	有り	妻入	○	3.65	3.03	11.06	1.20	3.70	3	11	39	○	横	2.3				合掌	
52	T	南宮字町		昭和46年	聞取り	1971	有り	平入	○	5.78	3.63	20.98	1.59	4.40	5	13	30	○	横	2		○	○	合掌	

※○は該当有り、空欄は該当無し、-は不明のもの

認識された。調査した対象ではNo. 43の板倉が恩賜郷倉であり、当時は宮城郡多賀城村の八幡地区の組合で運営されたものと思われる。巻末の郷倉建築設計図では標準的な平面図、立面図、断面詳細図が掲載され、その平面図

から規模は2.5間×4間、柱間は芯々1.5尺(455mm)である(図1)。したがって、郷倉の図面資料としては唯一のものであるという希少性も含めて、この形態をここでは板倉の基本形と考えたい。

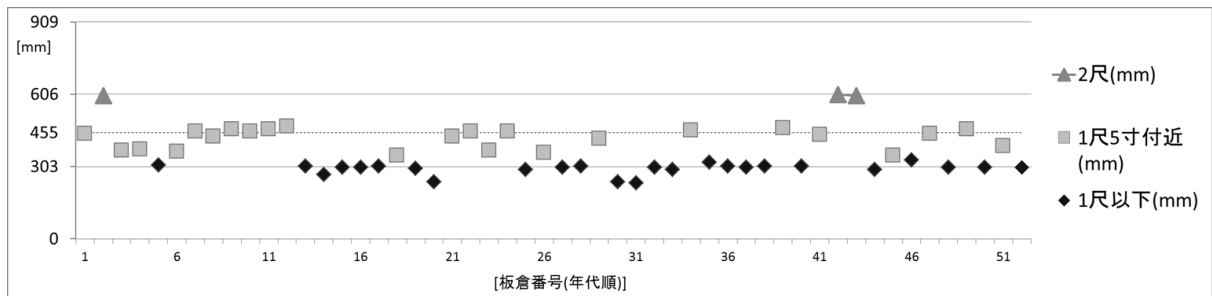


図3 柱間隔(芯-芯)の数値

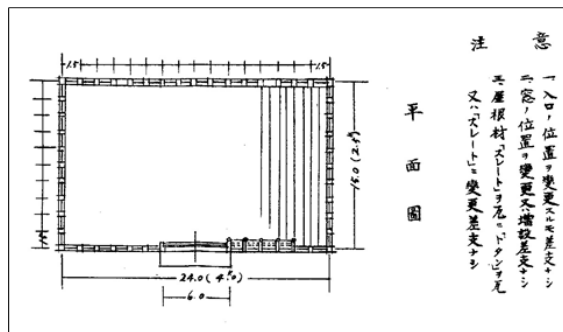


図1 郷倉平面図

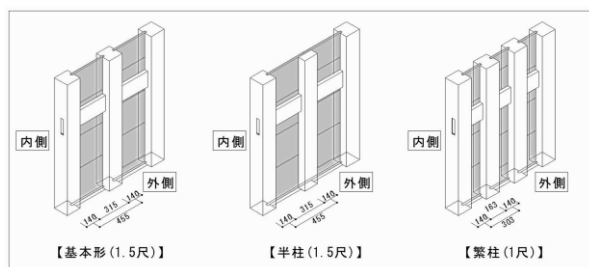


図2 柱間隔とその類型

#### 4. 多賀城市の板倉の形態と技法

##### (1) 柱と柱間隔

柱の形式では本柱のみの形式と、本柱と半柱を用いて構成された形式に区別ができる(図2)。半柱は外側から目視した場合には柱があるが内側からは見えなく、板壁でちょうど半分に分かれた格好になる。半柱を用いている7棟の倉のうち、3棟が江戸時代後期の建設年代であることが判明している。残りの倉も風蝕具合や聞き取り調査などから比較的古いものだと推定できる。また、半柱を用いている板倉の面積は平均で15.01㎡、棟木の高さの平均は3.86mと規模が小さく、簡素化、簡略化した板倉といえるが、柱間隔だけは狭く見えるようにしたものと考えられる。

その後、明治期には本柱の配置が目立ち、大正期には半柱を用いることはなくなった。No. 20、敷地内に二棟あるNo. 30南棟、No. 31北棟では半柱を用いながらも柱間隔が芯-芯23~24cmと大変狭く、同様の柱構成で間隔の狭いNo. 5を合わせると、明治時代の中期以降

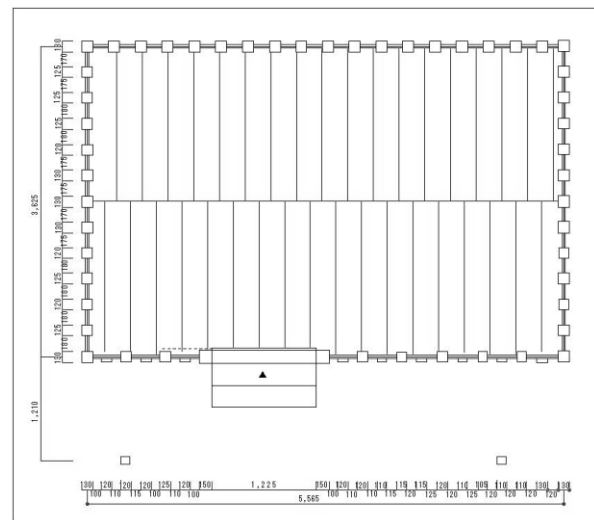


図4 平面図(No. 20)

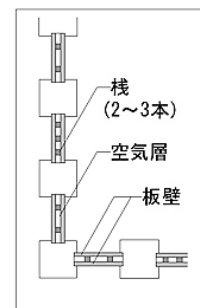


写真2 繁柱(No. 20) 図5 二枚板(No. 16)

には本柱形式のみへと移行したものと考えられる。柱間隔は概ね等間隔で、郷倉平面図の1.5尺よりも極端に狭いものもあるが、尺貫法における2尺(610mm)、1.5尺(455mm)、1尺(303mm)のそれぞれの値に集中している(図3)。そこで、本報告でも繁柱は柱間隔が芯々で1尺(303mm)程度か、それ以下のものであると提案したい<sup>注7)</sup>。繁柱が定着した理由は、①柱となる木材の材料が入手しやすくなった、又はコストが下がったこと、②他家に対する見栄えの意識、③防犯意識の高まりなどが挙げられる。

中でもNo. 20の板倉では、半柱を用いているものの正面方向のみに留まり、両側面・背

面は本柱で構成された繁柱の倉である(図 4、写真 1, 2)。このことから、半柱・繁柱の双方とも構造面の強化に用いたのではなく、柱が密に並ぶ形式が見栄えが良いとされ、一種の威厳を示す効果があったものだと推測できる。よって半柱は、①外からの侵入を防ぐ防犯、②柱が多く豪勢に見せる役割を担っていたと考えられる。

以上のことから、多賀城市では江戸時代後期は 1.5 尺程度の柱間隔が主流であり、その中で半柱も用いていた。その後、繁柱の技法が採用され明治時代には一定数定着したが、依然として 1.5 尺から 2 尺の間隔の郷倉を含む一般的な倉も半数程度建設されてきた。床面積では 10 m<sup>2</sup>程度のものから 30 m<sup>2</sup>程度のものもあり、大きく差が開くが、梁間と桁行の比では、1:1.4 付近に収束されている(表 1)。

## (2) 壁組

板壁には縦張りとは横張りの違いがあるが、多賀城市においては 52 棟中 51 棟が板を横向きに落とし込んだ横張りである。6 章で述べる他地域を含めた分布でも縦張りとは横張りに明確に分かれ、この板壁の張り方の相違は顕著に表れた。

壁自体は、厚さ 2.0cm 程の板を落とし込み、板同士が噛み合った合決り(あいじゃくり)と呼ばれる加工で隙間が無いよう張られている<sup>注 8)</sup>。また、No. 15、No. 16、No. 20 の板倉は 2 枚板壁で、その接合部はそれぞれずらして組んでいた。特に、No. 16 は注目され、二枚の板の間に棧を入れて、空気層を作っている(図 5)。これらの技法は、室内の気密性や断熱性の向上を図った技法であると考えて間違いないであろう。柱間隔が狭くなれば縦向きの板を一枚入れる方が施工の手間が省けることを考えれば、繁柱で横入れの板壁に該当するのは、より手間がかかり上質であるとも言える。一方、修理の観点からみれば、横向きに一枚ずつはめ込む場合は部分的な修復も可能である。

壁組のうちもう一つ特徴的なのは貫の位置である。貫は極端に規模の小さい No. 9 には無かったが、唯一縦張りの No. 36 の板倉を除く全ての板倉で外側に組まれ、70cm 程度の間隔で 3~5 本の貫を配している。調査対象の中では、多賀城市に分布する横張り板壁の場合は貫を外側に、対して北部沿岸地域に分布する縦張り板壁では内側に入る傾向が認められる。また、前節で記した柱の間隔は強度の向上を目的にしたものではなく、板倉の強度は貫が

重要であったことが確認される。

## (3) 小屋組・屋根

小屋組は、全ての倉で妻側に和小屋を組み、小屋梁が 1~3 段で構成されている。一方で内部では、梁や束を要しない合掌組(または登り梁)を用いた倉が多く、全体で約半数が内部に合掌組を用いた造りであった。これらは中二階を設置している倉が多く、広いスペースの確保や作業効率の向上の目的から普及したと考えられる。二棟が隣接して並んだ No. 22、No. 23 では、互いに建設年が明治期であり、柱幅や桁行、床高や屋根が酷似しているものの、小屋組が和小屋組と合掌組とで異なる。このことから、当時から二通りの組み方のうちどちらかを選択することが可能だったといえる。

屋根組みでは一般的な切妻屋根と切妻置き屋根(二重屋根)が確認できた。置き屋根とは、既存の野地板の上にさらに小屋束を立て、通気性を確保した上でもう一段屋根を被せる構法である。土蔵の屋根に多いが、板倉でも断熱効果が期待でき下層の屋根を風雨から守る機能もある。

## (4) その他

表 1 より移築された板倉が 16 棟あることから、土蔵よりも板倉本来の身軽さの利点を生かしていたことがわかる。また、動線が短い対面式の配置が多いことや、入口に鼠返し<sup>注 9)</sup>が設けられていることなどから、使い勝手がよく貯穀の機能を少しでも高めようという意識が感じられる。

入口の庇周りには多くの装飾や組み物が確認できた。中でも雲形の持ち送りや、斗組、肘木などは寺社建築を彷彿とさせる高い技術が用いられている。特に視線が集まる入口付近を豪勢にすることで、個人の財力を誇示したいという意思があったものと考えられる。

建具は外に板戸と内に格子付き網戸の 2 枚で構成されている。鍵はかき出し錠で、シリンダーの役割を持つ細長い錠の部分に、ひっかき棒を掛けて抜く手順で開錠できる。100 年以上経った今でも現役で使用されている程精巧な造りであり、柱間隔が狭いことと合わせて防犯の意識の高さが窺える。

## 5. 大工と墨書

安政 3 年(1856)の「宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」<sup>注 10)</sup>によると、多賀城周辺の職人の状況が分かり、そのうち市川村などの今回の調査対象地の大工とその氏名をまとめたものが表 3 である。板倉の墨書に記さ

表 3 安政 3 年の多賀城地区の大工職などの職人名

地域・地区名	新田村	山王村	南宮村	市川村	高橋村	八幡村
役職:名前	大工:長之助	屋根葺き:久助	屋根葺き:萬助	大工:栄治	大工:松蔵	大工:長田利右衛門
		木挽:長蔵	大工:丈助	大工:才三郎		大工:今野要八郎
			大工:久太郎			大工:太蔵
						屋根葺き:輔治
						屋根葺き:権十郎
						屋根葺き:善吉

表 4 調査対象板倉の墨書や棟札から判明した職人名と普請年月日

板倉番号	所有者	記載内容	年月日
1	S	市川巴 大工棟梁:齋三郎	天保六年 初夏
2	E	(かし親覚え書)… 糊の貸し借り記録	弘化四年
3	K	棟梁:高橋栄治	文久三年 四月
4	K	棟梁:加藤円之助 (戸前の修理)…大工への賃金	明治四拾四年 旧十月十九日着手
5	A		文久四年
10	I		明治六年 十二月
11	Y	大工棟梁:高橋栄之助、及び工賃	明治二十二年 十月
12	K	(鼠まつり)…行事等の記載※他数件	明治四十五年 旧一月十四日
35	O	齋藤長之助	大正拾四年 旧七月二十三日
41	W	棟梁:鈴木太郎	昭和四年 旧七月
50	S		昭和二十三年 四月二十五日

れている、No.1S 家住宅板倉(市川地区)の才三郎、No.3K 家住宅板倉(市川地区)の高橋栄治の両名は、付請書の記載と同名<sup>注11)</sup>であり、年代や居住地もほぼ一致していることから、同一人物である可能性が高い(表 4)。この二名の関わったと見られる板倉が判明したことは今回の調査の大きな成果のひとつと言える。黒坂貴裕氏の論文<sup>注12)</sup>によれば、繁柱形式の宮城県北上川流域の板倉は気仙大工に関わりがあると述べているが、江戸時代後期頃の多賀城では、装飾等に高い大工技術が見て取れるものの、今のところ気仙大工の関わりを示す記録は見られなかった<sup>注13)</sup>。

## 6. 他地域の板倉との比較

県内 13 の市町村で 50 棟の板倉外観調査を行った他、参考資料として 4 つの報告集<sup>注14)</sup>を加えて、宮城県内の対象 80 棟の板倉(加えて岩手県一関市より 1 棟)を柱間隔と板壁の張り方の区分を地図に示した(図 6)。仙台市、多賀城市、大郷町、利府町、松島町では横板張りの板壁が、気仙沼市、石巻市、涌谷町、大崎市には縦板張りの板壁が目立ち、両者は明確に区分される。大崎市古川には漆喰塗された板倉が(写真 3)、更に岩手県一関市に板壁の内部に砂を入れた板倉が存在する<sup>注15)</sup>。これら二つの板倉の発生の順序は明確ではないが、両者とも柱が密に並び、前者では板壁外側に木舞を組みその上に下塗りと上塗りを施す技法であり、後者は板壁の間に砂を充填した技法で、両技法とも縦板張りの流れを汲み、更なる気密性の向上を目的に発案されたものと考えられる。柱間隔では繁柱の 1 尺以下と、一般的な間隔として 1.5 尺程度か又はそれ以上のものとに分類している。縦板張りの壁の場合、繁柱が多い為柱間隔が狭くなれ

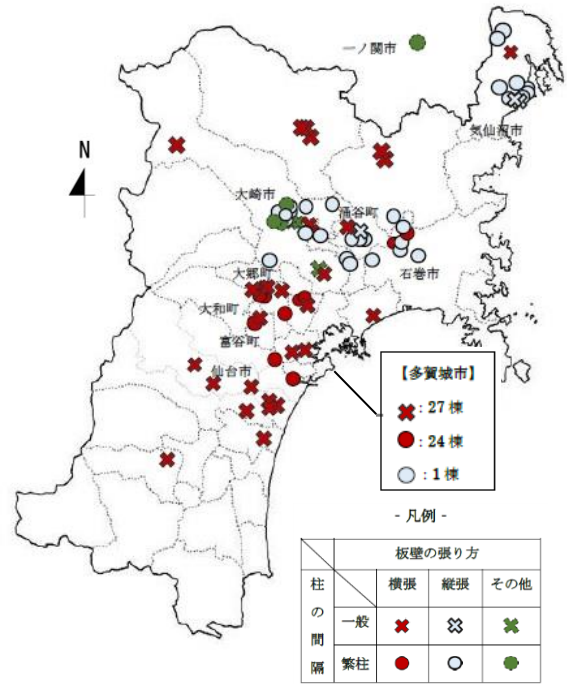


図 6 板張りとは柱間隔の分布



写真 3(左) 大崎市古川の漆喰塗り板倉  
写真 4(右) 石巻市河北町の繁柱の板倉

ば一枚ずつ落とし入れる横板張りは適さず、縦に 1 枚で納める方が適している。中でも、実測調査を行った石巻市河北町の板倉においては柱間隔が芯-芯 23 cm (内法で 8 cm) の繁柱、一枚の板を縦に入れた壁、貫は内側であり、多賀城市を始めとした宮城県中部とは対照的であった(写真 4)。

## 7. まとめ

多賀城市の板倉の特徴は、①板壁を横張りとした「はめ板倉」、②板壁の接合の多くは合決り、③板壁外側に貫を用いる、④小屋組は和小屋組と合掌組の複合形、である。中でも、横板張りの板壁のまま 1 尺程度まで柱間隔を狭くしている繁柱や、二枚板張りの技法、置き屋根を採用している例が認められる。これらの技法が導入されている板倉は上質であると考えられ、基本形の技法と比較したものが表 5 である。

県内全体で見れば、①1.5 尺程度の柱間隔、



表5 横板張り板倉における基本形の技法と上質な技法の比較

	基本形の板倉	上質な板倉	
柱間隔 (数値)	1尺5寸程度 (455mm前後)	1尺未満 (303mm以下)	
繁柱の柱 壁組	(該当なし)	本柱と半柱で構成	本柱のみで構成
屋根	一枚板つき合わせ	合決り・二枚板	
入口装飾	簡素	切妻置き屋根(二重屋根) 斗組や持ち送り、彫り物等	

②これらの柱を横張りの板壁で組む、③貫が外側に生まれ、これが大部分を占める基本形式であると言える。一方で、気仙沼市や石巻市をはじめとした北部沿岸地域では、④1尺以下の繁柱、⑤縦張りの板壁、貫は内側に組む形式が浸透している。そのうち多賀城市の板倉は、郷倉の図面や他地域との比較から基本形式とそれに近い形式も少なくないが、半数近くは横板張りの繁柱形式が定着していた。繁柱の中でも、柱幅よりも狭く並ぶものも確認でき、板壁の面積が更に小さくなり断熱性・気密性を上げること、また木材をふんだんに使うことで財力を示すことがその背景にあったと考えることができる。

以上のことからこの地域を中心とした「はめ板倉」には、大工職人による板倉の多様な技法が確認できたが、それらは一様に土蔵に近い気密性を求めているものであったと考察できる。また、多賀城市の板倉は、No.1からNo.52までの約140年間、規模の範囲が広く、妻入・平入も約半数ずつであるが、梁間と桁行の比などはほぼ同じ数値で推移しており、大きな変化はなかった。しかし、庇周辺の彫り物等の装飾をはじめ、繁柱や半柱、板壁の張り方などに技法上のランクの差を認めることができた。

最後に、これらの倉を現在でも大切に所有し調査にもご協力頂いた地域の皆様、多賀城市文化財課の方々に心から感謝の意を表する。

### 注釈

注1)「板倉等調査・保存・活用事業に関わる調査」とは、多賀城市が国から認定を受けた「多賀城市歴史風致維持向上計画(平成23年11月)」における施策のひとつである。同計画の各項目は、歴史的風致を維持及び向上させ、魅力あるまちづくりに寄与することを目的としている。

注2)「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(黒坂貴裕、安藤邦廣、沖本太一、刈内一博 日本建築学会計画系論文集 第576号, pp.45~52, 2004.2)pp.45及びpp.52によると、繁柱の仮称について「羽目板倉の内、柱もしくは半柱を細かく配置することで、半柱を含んだ柱間寸法(芯々)が1尺前後まで狭くなるものを「繁柱の板倉」と仮称し」とある。

注3) 注釈2前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.51)

注4) 注釈2前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.52)

注5)「宮城県多賀城市における板倉の形態」(渡邊亮、高橋恒夫 日本建築学会東北支部研究報告集 計画系第77号, pp.153~156, 2014.6)で一部を報告している。

注6)「宮城懸郷倉誌」(宮城県経済部 1936)は、国内と宮城県下における備荒施設の沿革概要や郷倉制度の状況を記載したものである。また、昭和9年の東北地方の凶作を機会に、御下賜金を基礎として建てた郷倉について恩賜郷倉と呼んでいる。

注7) 注釈2前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.45及びpp.52)

注8)合決りを用いている板倉は31棟と半数以上あり、5棟は用いられておらず、12棟は不明であった。

注9)鼠返しが設けられている板倉、あるいはその留め板が設けられている板倉は34棟と過半数を占めている。

注10)「宮城郡村々諸職人渡世之者職道に付請書」(多賀城市史5歴史史料(二)五 生活・文化, pp.573~576)とは、宮城郡の大工や棟梁をはじめとした職人の名簿である。

注11)同じ「さいさぶろう」の読みであることで同一人物と考えられる。

注12)注釈2前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」(pp.50)

注13)「近世在方集住大工の研究」(高橋恒夫 中央公論美術出版, 九章 民家普請の出稼ぎと大工系統)pp.213によれば、気仙大工の主要な出稼ぎ先は、南は仙台北付近までと考えられており、当時の多賀城もその範囲内にある。

注14)「宮城県北と岩手県南の板倉」(東北工業大学工学部建築学科高橋研究室, 平成18年度卒業論文)並びに前掲「近世在方集住大工の研究」(pp.233~241)に記載の対象より8棟、「宮城県の国登録文化財一覧」

(<http://www.pref.miyagi.jp/site/sitei/touroku-index.html>)に登録の板倉より10棟、前掲「繁柱形式の板倉における構法の地域性とその類型化」に記載されている対象より12棟。

注15)注釈13前掲「近世在方集住大工の研究」(pp.233~241)

### 参考文献

- 1)安藤邦廣+筑波大学安藤邦廣研究室：小屋と倉-干す・仕舞う・守る・木組みのかたち-, 建築資料研究社, 2010.5
- 2)民俗学研究所, 下中彌三郎：総合日本民族語彙, 平凡社, 1955.6
- 3)太田邦夫：-世界の住まいにみる-工匠たちの技と知恵 学芸出版社 2007
- 4)後藤治, 二村悟, 小野吉彦：食と建築土木, LIXIL出版, 2013
- 5)安城市教育委員会生涯学習部文化財課：安城の農業倉庫と産業組合施設 安城市文化財調査報告書 第4集, 2012.4
- 6)小林久高, 濱定史：熊本県五木村における板倉の建築構法, 日本建築学会技術報告集 第19巻 第43号, 2013.10